

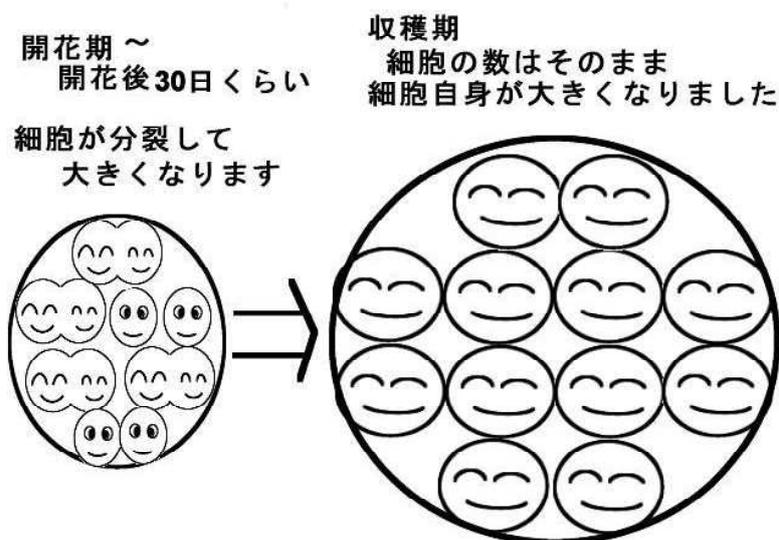
摘果作業

早期摘果で果実促進

りんごの果実肥大は、開花後約1か月の間は細胞の数の増加、その後収穫期までは細胞の肥大によって起こります。

このため、開花後1か月の間に果実への養分分配量が少なかったり、天候不順で細胞分裂が抑制されたりすると、果実の細胞数が少なくなり、小玉果となる可能性が高くなります。

早期摘果で果実の養分競合を減少させ、細胞分裂を活発にすることが大玉生産につながります。



残す果実は？

①中心果を残す

側果は中心果と比較すると果実の肥大が劣り、ツルサビや裂果などの障害も多くなります。特に「つがる」や「千秋」は側果にサビが出やすいので、できるだけ中心果を残します。

②果形が良く、肥大の良い果実を残す

幼果期の果形や肥大は、収穫時の果形や果重と関係が深いことが知られています。原則的には中心果を残しますが、果形や肥大が明らかに劣る場合には側果を残すこともあり得ます。

③葉数の多い果そうの果実を残す

果実への光合成転流物質生産には果そう葉が重要な役割を果たしていることから、果そう葉の多い果実を残します。

摘果程度と時期

仕上げ摘果は落花後25日頃までには終わらしましょう。この時の摘果は最終着果量より10～15%多く残します。

特に、「つがる」は他の品種に比べて早期落果の危険が高いため、早めに摘果を終えてください。

また、「ふじ」は隔年結果を起こしやすい品種なので、摘果の遅れや過着果のないようにしてください。

品種ごとの適正着果量は第1表に示すとおりですが、他にも次のことに注意して下さい。

①樹勢や樹の生育状況によっても着果量は加減します

樹勢が弱い木では着果量を減らして樹勢回復につとめ、強い木では多めに着果させ樹勢を安定させます。

②光環境を考慮する

光環境の良い枝では標準着果量よりやや多めに、光環境の悪い枝ではやや少なめに着果させますが、樹冠内部の光環境の悪い枝では弱小芽が多く、果実が着色不良や小玉果となりやすいので注意してください。

第1表 着果基準

着果基準	品 種
3～4頂芽1果	つがる、王林など
4～5頂芽1果	ふじ、千秋、ジョナゴールドなど